

令和 6 年度 園評価書

園番号

31

園名 飯田北こども園

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A:よくできている B:概ねできている、C:あまりできていない、D:できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
心身ともに 健やかな子	一歩ふみだし、 やってみる	子どもが安心して自分の思いを言葉や表情で表す	<ul style="list-style-type: none"> 様々な表現を見逃さず受け止め共感して関わる事で、安心して自分から思いを伝えようとする姿が昨年度より多く見られるようになってきている。少数数ではあるが、時と場(友達の前やトラブルの時等)によっては我慢したり、言葉で表現する事に苦しさを感じたりして、十分に自分の思いを表現できない子がいる 	A	A	<ul style="list-style-type: none"> 自信をもって活動に取り組んでいる姿が見られる。こども園は0歳児から5歳児が生活していて発達の違いが大きく、関わりに難しさがあると思うが、成長段階を捉えている事で、のびのびと遊ぶ姿がみられる。 環境をいろいろ工夫されている 子どもの姿に沿った保育をしている事がよくわかった 	<ul style="list-style-type: none"> 一緒に遊ぶ中で子どもの発信を見逃さず、思いを読み取る。表現が少ない子に対しては、必要に応じて代弁したり保育者と一緒に伝えたりして担任間で同じ関わりをすることで、表現する喜びを感じ、自信がもてるようにする 保育者も一緒に試したり工夫したりして遊ぶ事で、子どもの“やってみよう”“こうしたい”という思いを引き出す。また、乳幼児会議(合同月1回) 週案会議(週1回)等で各歳児が経験させたい事のすり合わせを行い、発達の見通しをもって教育保育する 保育者も一緒に運動遊びを楽しみ“やってみよう”という気持ちを引き出す。子ども達の興味、発達を捉え各学年で経験させたい運動遊びを継続していく事ができるように年度初めに学年間で経験させたい事を確認し、見直しをもって取り組んでいく
		自分で遊びに必要な物や場所等を選び工夫したり試したりしながら遊ぶ	<ul style="list-style-type: none"> 様々なコーナーや素材を準備していった事で、自分で遊びや必要な物を選び遊びの場を作ったり繰り返し遊んだりする姿が多く見られるようになった。その中で、試したり工夫したりする姿も増えていった 	A	A		
		様々な運動遊びを経験する中で、楽しんだり、挑戦したりする	<ul style="list-style-type: none"> 運動遊びを楽しんだり挑戦したりする姿を具体的な言葉で褒めて認め、関わりや環境作りを継続してきた事で自信に繋がりが“やってみよう”とする姿が見られた。しかし苦手意識や経験不足等に個人差があり“やってみよう”と自信がない子も中にはいる。挑戦しようとするタイミングは一人一人違うため、その瞬間を見逃さずに関わるようにしている 	A	A		

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)	
1 こども園における 教育及び保育	(1)0歳から小学校 就学前までの一貫 した教育及び保育	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識し、一人一人の発達や経験に沿った適切な援助を行う	<ul style="list-style-type: none"> 月の指導計画作成時に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)を確認し、意識して作成する事ができた。週日案で適切な援助が行えたかどうかを振り返り、明日の保育に繋がるように実践していったが、10の姿が自分の中で理解しきれていない所もあった 	B	B	<ul style="list-style-type: none"> 「取り組んでいること」と「できたこと」の評価の仕方が難しい。努力をしていることはよくわかる 保育者と子どもの思いにズレが生じたり、保育者の思いが先走ったりする時があり、子どもの思いを読み取ることの難しさを感じる 若い人の発想は柔軟性があり面白く、新しい考えが出てくる。ベテランの良さや若い人の良さを織り交ぜながら教育保育を進めていくと、今の時代にマッチして行くのではないかと、観察してどう対応していくのか、日常的によく考えられている 災害のときは難しいが、「減災教育」を受けて即実践に活かし、努力されている 昔は硬い食べ物が主流だったが、現代は柔らかい食べ物が多い。改めてよく噛んで食べる習慣をつけることが大切だと思った。また、よく噛むことで脳も活性化されていく 小学生は“よく噛む”はできていない。乳幼児期から行っていくことは良いことだと思う 小学校は研修のときの評価はAが多い。自分たちで納得していれば評価がAでも良いのではないかと。会議だけでなく、隣の職員と少し話すだけでも、共有や学びがある 研修は昨年度より前進しているのであればAでよいのではないかと 環境作りではアイデアを出し合い工夫されていることは素晴らしい。“片手間にできる”ことが良い ICTは小学校でも行われているが、話すことも大切である。上手に使用できるとよい 9、10に関しては、今年はとても努力したことがわかる。交流館の展示もとてもよかった。活用が素晴らしい。小学校も交流の機会をねらっている。これからはもっと積極的にアプローチしていけば良い 石川町の子どもは、ほぼ高部東小学校だが、自治会は飯田地区になるため、子どもが自治会の行事に来ない。大人と子どもの認識が違っている。今後どうしていけばよき悩みどころでもある 今年度は6年生が地区の防災訓練に参加したり、課外授業で地区の危険箇所を調べて自治会に提出するなど、つながりがあった。石川町としてもそれを受けて地域の町作りとして改善を図っていきたいと思っている 	<ul style="list-style-type: none"> 月の振り返りのエピソード検討の中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について話し合う場を5分程度設け、全体で多面的に話し合い10の姿についての理解を深め、より適切な援助に繋げていく 笑顔で挨拶をしたり子どもの姿を共有したりしていくことで信頼関係を築いていく 欠席が続いている子への対応を考え、職員間で統一して関わっていく 子どもの遊びに見通しをもったり予測(短・中・長期)したりして子どもの姿から保育のプランを毎日もち環境準備を行う。また、共有の場作りについてアイデアを出し合っていくために、クラス、学年、乳幼児会議で話し合い職員間で連携、協力しながらタイムリーに環境作りを行う 予想される被害状況をより細かく考え想定していく 実施記録は2日以内に事務室で記入し、タイムリーに共有していく。検討事項は会議で話し合い課題と改善策を明確にしていく 子どもが食べ物をよく噛むことの意識が育っていくよう、声かけを行ったり、たくさん噛むと口の中で食べ物がどういう状態になるのか子どもが実際に体験し、感覚的に理解できるようにしていく 今後もケース会議の中でABC分析を用いて支援方法を考えたり、職員間で話し合ったりする機会を計画的に作る。また、職員が情報共有を行う中で同じ手立てで関わる事ができるよう引き続き意識して声をかけ合っていく 分掌が最後まで責任をもって取り組めるように振り返る日、片付ける日、担当者などを企画書に明記しておく。また、出てきた課題を職員会議で報告するようにする 公開保育からの学びを職員自身が教育保育の中で実践できたのか、個々で検証を行っていたが、次年度からは、クラスや学年毎で学びを活かした教育保育ができたかの検証もしていく 園全体でアイデアを出し合い、共有しながら環境を作っていく 玄関ホールだけでなく、戸外も含め生活動線の活用を考えたり季節を感じられたりするものを取り入れていく 体調不良や早い迎えなど事前にわかっていることは口頭で伝えてもらえるよう働きかける 引き続きコドモンのドキュメンテーション機能を活用し、日々の様子を写真入りでわかりやすく伝えていく 活用する機能を増やしていく 引き続き年長児は近隣校や園との交流の機会を多くもてるように計画をたて、年中児も今年度同様小学生との交流がもてるよう、年長児と一緒に参加する機会を作っていく 職員は公開授業や公開保育、小学校の“学びの会”に積極的に参加したり、学校職員に来園を働きかけたりして交流を図れるようにする それぞれの職員が発見した資源を職員間で共有できるように職員会議や週案会議で定期的話し合う 得た資源や情報をどう活用していくか学年で話し合い、見直しをもって教育保育計画に取り入れていけるようにする 今年度同様、地域だよりを活用して飯田地区の方々に呼びかけをしていく 	
		(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	一人一人の家庭状況、在園状況に応じて子どもが安心して過ごすことができるよう丁寧に関わる	<ul style="list-style-type: none"> 保護者が安心して預けられるように、保育者が家庭状況や在園状況を把握し職員間で共有して丁寧に関わりを行ってきた事で、子どもも安心して過ごす事ができている。在園時間によって関わる事が難しい家庭には電話対応をしたり職員間の情報伝達を密に行ったりして支援するようにしているが、様々な状況がある中で保護者対応の難しさも感じられる 	B			B
		(3)環境を通して行う教育及び保育	子どもと一緒に遊ぶ中で子どもが「やってみよう」と思える環境作りや瞬時の再構成を行う	<ul style="list-style-type: none"> 子どもと一緒に遊ぶ中で思いを探り、読み取り、共感しながら「やってみよう」と思える環境作りをしていった。また、保育者が子どもに相談したり一緒に考えたりする事でタイミングを図りながら再構成していったが、遊びの予測やアイデアが足りず瞬時の再構成に課題があった。また、環境の維持や継続して再構成する事が難しいと感じることもあった 	B			B
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	様々な災害を想定した訓練を実施後、課題や改善策を明確にして、次の訓練に活かす	<ul style="list-style-type: none"> 減災教育を受け地震の規模や予測される被害状況を企画書に記載し様々な災害を想定して訓練を行った。しかし予測される状況を想定しきれていない所があった 担任間で実施後に課題を出し合い改善策を検討し次の訓練に取り入れていく事はできたが園全体で共有する機会が少なかつた 	B	B			
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	「よく噛んで食べる」大切さや方法を知らせ、子どもが意識して取り組む	<ul style="list-style-type: none"> “よく噛むこと”への意識が向くような声かけや、食育での「よく噛んで食べる」という活動(根菜やスルメイカ等を噛む)を実際に体験した事で、子どもが噛む回数や食べ方を気にする姿がみられるようになってきたが、よく噛む事への意識はまだ定着していない 	B	B			
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	ケース会議や特別支援研修を通して、一人一人に合った支援方法を共有し、同じ手立てで関わる	<ul style="list-style-type: none"> 職員間でABC分析を用いて子どもの様子を捉えながら支援方法を考えた。また、日常的に子どもの支援方法について担任間で話し合ったり、他の職員がクラスに入る際に関わり方を伝えていったりした事で同じ手立てで関わる事ができるようになってきている。しかし、個々の関わりや支援方法を全体で検討したり共有したりする機会が少なかつた 	B	B			
5 組織運営	(1)組織体制の充実	分掌の役割を明確にし、職員全体に対しスムーズな情報伝達や共有を行い教育保育に活かす	<ul style="list-style-type: none"> 分掌で企画について相談し職員会議に間に合うよう企画書を提出した事で職員が見直しをもって準備や教育保育を進める事ができた。一方で取り組みに対する振り返りや共有が遅くなり、使用したものを一時置いておく事で忘れてしまう事があった 	B	B			
6 研 修	(1)研修体制の充実	園内研修で得た学びを活かし実践されていることを検証する	<ul style="list-style-type: none"> 公開保育での学びの一つに絞り、共有した事で、その学びを活かして自身が何を実践するのが明確になった。また、自身が保育の中で実践したことを記録し検証を行っていた。個々では学びを活かしているが、クラスや学年での共有ができるとうい 	B	A			
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	生活動線の中で様々な経験ができるような環境を作る	<ul style="list-style-type: none"> 週案会議でアイデアを出し合い、玄関ホールに線路を描いたり足跡をつけたりした事で、自然とケンパやジャンプをするようになっていき、戸外の運動遊びにも繋がった。玄関だけではなく様々な生活動線を考え、戸外等にも取り入れ遊びや経験の幅を広げていく必要がある 	B	A			
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	ICT(コドモン)の活用を拡充する中で、保護者へ子どもの成長を発信したり共有したりする	<ul style="list-style-type: none"> 今年度は身体重測定記録、連絡帳、おたより、ドキュメンテーション、アンケート機能を活用し、写真を入れたりエピソードを具体的に記入することで子ども達の様子を伝わりやすくし、成長を共有できるようになってきている。一方で常にコドモンの確認ができるわけではないため、早い迎えや体調不良について等が口頭伝達なしでコドモンに入力されていると、確認できずに対応に困ったことがあった 	B	B			
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	近隣園や近隣校と連携を図り、職員同士、子ども同士の交流を行う	<ul style="list-style-type: none"> 小学校の授業参観時や学びの会で教員と交流を行う中で、子どもの育ちに関する情報を共有したり、園と小学校での活動の取り組みの情報を交換し合ったりして、教育・保育についての相互理解を深めていった。一方で園児は年長以外には近隣園や近隣校との交流の機会をもつきっかけがあまりない 	B	B			
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	地域の資源を教育保育に活かす	<ul style="list-style-type: none"> 近隣の方の畑でさつま芋等を取穫体験し、それを使用してクッキングに繋げたり、いちごハウスで苗植え体験から、どう育っていくのか経過を観察させてもらい農作物への興味を深めたりしていった。また、散歩先で見つけた物を職員間で散歩マップを活用して情報共有していくなど地域資源に対しての職員の意識が向上した。今後この情報を実際の教育保育で活用したり資源を増やしたりしていきたい 	B	A			